

長岡市埋蔵文化財調査報告書

金八遺跡

—県営経営体育城基盤整備事業（潟2期地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2013

新潟県長岡市教育委員会

長岡市埋蔵文化財調査報告書

金八遺跡

—県営経営体育城基盤整備事業（潟2期地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2013

新潟県長岡市教育委員会

例　言

1. 本書は、新潟県長岡市寺泊引岡216番地他に所在する金八遺跡の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、県営経営体育成基盤整備事業（潟2期地区）に伴うものであり、平成17年度に寺泊町教育委員会が試掘確認調査を行い、平成24年度に長岡市が新潟県長岡地域振興局から委託を受けて本発掘調査を実施した。
3. 試掘確認調査に要した費用は当時の文化財保護部局である寺泊町教育委員会が負担し、国庫および県費の補助交付金を受けた。また、本発掘調査に要した費用は原作者である新潟県長岡地域振興局がその9割を負担し、残りの1割は長岡市が負担し国庫および県費の補助交付金を受けた。
4. 遺物の注記は遺跡名の略記号「K P」の後、出土位置、取り上げ番号等を記した。
5. 調査・整理体制は以下のとおりである。

(試掘確認調査) 平成17年度

調査主体 寺泊町教育委員会（教育長 柳下明也）

事務局 寺泊町教育委員会（事務局長補佐 本合 収）

調査担当 寺泊町教育委員会 社会教育係主事 八重樋由美子

(本発掘調査) 平成24年度

調査主体 長岡市教育委員会（教育長 加藤孝博）

事務局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋茂人）

調査担当 長岡市教育委員会科学博物館 主任 加藤由美子

調査員 長岡市教育委員会科学博物館 主任 小林 徳

調査補助員 松井 智（株式会社吉田建設）

現場代理人 徳吉喜彦（株式会社吉田建設）

(整理作業) 平成24・25年度

調査主体 長岡市教育委員会（教育長 加藤孝博）

事務局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋茂人）

整理担当 長岡市教育委員会科学博物館 主査 加藤由美子

6. 本書の執筆・編集は田中 靖（長岡市教育委員会科学博物館）の指導の元、加藤由美子、小林 徳、松井 智が行った。

7. 発掘調査で出土した遺物及び測量図面・写真等の記録類は、長岡市教育委員会で保管している。

8. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なる御教示・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（順不同・敬称略）

寺泊引岡集落 三島郡北部土地改良区 新潟県長岡地域振興局 新潟県教育庁文化行政課

社団法人長岡市シルバー人材センター寺泊ワークセンター 有限会社成田建材

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	1
1 遺跡の概要	
2 周辺の遺跡	
第Ⅲ章 調査の方法と経過	4
1 試掘確認調査	
2 本発掘調査と整理作業	
第Ⅳ章 調査の成果	6
1 調査区の設定と基本層序	
2 遺構	
3 遺物	
第Ⅴ章 まとめ	9

挿図・表目次

第1図 遺跡の位置	2	第1表 周辺の遺跡	3
第2図 周辺の遺跡	3	第2表 遺構観察表	10
第3図 調査区周辺図	4	第3表 遺物観察表	10
第4図 調査区配置図	5		
第5図 基本層序	6		
第6図 NR2~5セクション模式図	6		

図版目次

図版1 調査区全体図	図版9 遺物実測図(2)
図版2 IV層遺構分割図	図版10 調査全景・基本層序写真
図版3 V層遺構分割図(1)	図版11 遺構写真(1)
図版4 V層遺構分割図(2)	図版12 遺構写真(2)
図版5 遺構詳細図(1)	図版13 遺構写真(3)
図版6 遺構詳細図(2)	図版14 作業風景写真
図版7 遺構詳細図(3)	図版15 遺物写真
図版8 遺物実測図(1)	

第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成14年6月、新潟県長岡地域振興局（以下、「振興局」と）、寺泊町教育委員会（以下、「町教委」）は、寺泊町内で計画された県営経営体育成基盤整備事業（潟地区）に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。県営経営体育成基盤整備事業（潟地区）は、全事業面積505haを5地域（期）に分割して計画され、事業対象地には複数の周知の遺跡が存在した。また、その他に未周知の遺跡の存在も想定されたため、町教委は工事に先立って試掘確認調査を行い、その調査結果を元に再度両者で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行うことを提案し、振興局はこれに合意した。

平成17年4月、潟2期地区（竹森・戸崎・法崎・引岡・川崎・下曾根・鰐口）が県の事業採択を受け、町教委は同年9月から対象地内の試掘確認調査を実施した。調査の結果、周知の遺跡である金八遺跡（No.1210）、金八雨乞山遺跡（No.1211）、長八遺跡（No.1212）、弥助遺跡（No.1213）の詳細な内容が確認された。年が明けて平成18年1月1日、寺泊町は長岡市と合併し、経営体育成基盤整備事業（潟地区）に伴う発掘調査事業も新市へと引き継がれた。

平成21年9月17日、長岡市教育委員会（以下、「市教委」と）と振興局は、潟2期地区での埋蔵文化財の取り扱いについて再度協議を行った。協議の結果、金八雨乞山遺跡、弥助遺跡、長八遺跡については、先の試掘確認調査において遺物が希薄で遺構も確認できなかつたため、工事立会で遺跡の状況を記録保存することで両者が合意に至った。また、金八遺跡については、確認調査で遺物包含層から古代の遺物が一定量出土したこともあり、本発掘調査を行う方針で協議を進めた。面工事部分は保護盛り土で包含層・遺構面を保護することを条件として発掘調査の対象から除外し、本発掘調査の対象は工事掘削が不可避な排水路・パイプライン部分に限定することで両者が合意した。

平成24年1月11日、振興局と長岡市は金八遺跡発掘調査の基本方針を定めた「金八遺跡に関する協定書」を締結した。協定書では、本発掘調査は市教委が調査主体となり平成24年度に実施すること、整理作業は調査終了の翌年度に行い、年度中に報告書を刊行すること、事業にかかる費用は振興局が事業費全体の9割を、長岡市が1割を負担することが明記された。振興局は同年3月7日付け長振農第3626号で協定書に基づく本発掘調査を長岡市に依頼、市は3月29日付け長教博第374号でこれを受諾し、事業費用の内訳を含めた調査計画書を提出した。その後、4月23日付けで両者間において金八遺跡発掘調査の費用負担契約を締結し、同年5月、市教委は本発掘調査に着手した。

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の概要

金八遺跡は、新潟県長岡市寺泊引岡216番地他に所在する（第1図）。遺跡の立地する引岡集落は、日本海に沿って延びる東頭城丘陵の内陸側に位置し、同丘陵から羊齒の葉状に派生した小丘陵の谷部に集落が形成される。細長くV字に開いた谷部は耕作地として利用され、縁辺の丘陵裾部に20余戸の家並が点在する。海からの直線距離は約2kmと近いが、東頭城丘陵の尾根が障壁となり日本海からの強風は直接及びにくい。冬の降雪量は寺泊地域としてはやや多い方である。

金八遺跡は谷部の中程に立地し、現況は田んぼで標高は約14m、遺跡の総面積は約10,000m²である。遺跡は平成2年1月、ゴルフ場建設工事計画に先立って新潟県教育委員会が実施した分布調査で発見され、

周知化された。当時の聞き取りによると、昭和35年から始まった耕地整理の際、多くの遺物が出土したという。分布調査では須恵器片が採集され、平安時代を中心とした古代の遺物包含地として遺跡登録されている。

これまでに集落内では本発掘調査が行われたことがなく、今回の発掘調査により集落の歴史を示す新たな資料がもたらされるのではないかと期待された。

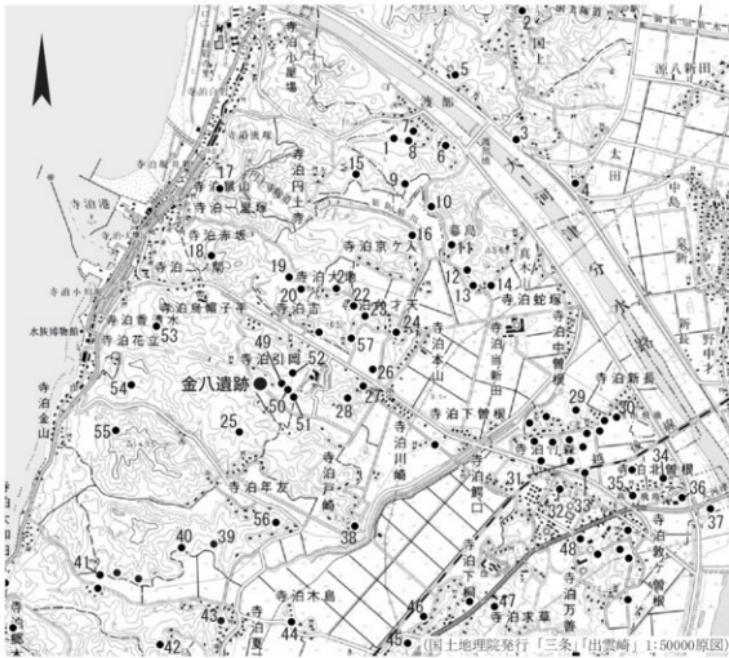
2 周辺の遺跡（第2図・第1表）

引岡集落には金八雨乞山遺跡（49）、長八遺跡（50）、弥助遺跡（51）等の古代の遺跡が丘陵の南側斜面に分布する。集落の北側の寺泊中学校が立地する丘陵上には、念仏塚群（52）があり、1辺3～4m、高さ0.5～1mの方墳3基が尾根上に並ぶ。詳細な時期は不明であるが、和島・寺泊・与板地域の東頸城丘陵の尾根上には、中世から近世に帰属すると考えられる円墳・方墳が多数確認されている。念仏塚群もその一種であろう。なお、集落周辺の周知の遺跡では古代の遺跡が最古だが、引岡地内の田んぼではかつて磨製石斧が採集された例もあると聞く。集落内に弥生時代以前の遺跡が存在しても不思議ではない。今回の発掘調査では縄文時代晩期の土器も出土しており、かつて採集された石斧と何らかの機的な関係を持つのであろうか。

引岡集落の北東、寺泊本山地区には大正時代まで、本基盤整備事業名の「湯地区」の由来にもなった「円土寺湯」という湯が存在した。大正期の大河津分水路工事の残土により埋め立てられ、現在は一帯に美田が広がっている。湯の埋め立て後に建立された「弁財天駕神碑」によると、在りし日の湯の広さは五百余町歩（500ha）もあったという。この汀線上には縄文時代中期から晩期の宝崎遺跡（9）、後・晩期の幕島遺跡（11）・京ヶ入遺跡（16）、中期の居村前遺跡（26）・法崎遺跡（27）・七十歩遺跡（28）など数多くの縄文遺跡が存在する。宝崎遺跡・幕島遺跡・京ヶ入遺跡は大量の遺物が採集されることで知られており、特に京ヶ入遺跡は江戸時代後期に橋茂世が著した『北越奇談』にもその名が見えるほど古くから知られた遺跡である。各遺跡間は湯によりつながっており、縄文時代の人々に円土寺湯が豊かな恵みをもたらしたであろうことが想像できる。続く弥生時代は遺跡数が減り、橋梁工事中に地表下8mから弥生土器が出土した本山舞台島遺跡（24）や、緑色凝灰岩やヒスイの玉作を行う諏訪田遺跡（31）が知られる。古墳時代の遺跡には、大河津分水路工事中に子持ち勾玉と須恵器の提瓶が出土した夕暮れの岡遺跡（3）や、古墳時代の堅穴住居や掘立柱建物、平地式住居等の建物跡が多数見つかった五千石遺跡（37）がある。五千石遺跡では古墳時代前期の鍛冶関連遺物が一括で出土しており、日本海を介した西日本社会との交流が想定されている。引岡の南東を流れる二級河川島崎川の沿岸には、古代の遺跡が多く分布する。島崎川は近世に信濃川と出雲崎港を結ぶ内水面交通路として利用され、古代においても地域の流通・交通手段のひとつであったと考えられる。上・中流域には「沼垂城」「郡司符」木簡が出土した八幡林官衙遺跡や、下ノ西遺跡、門新遺跡など古志郡衙や駅家関連の遺跡が集中する。寺泊竹森の残丘上には横瀧山廃寺跡（32）が出現する。横瀧山廃寺跡からは白鳳期の軒丸瓦や鶴尾、埴輪が出土しており、越後における初現期の寺院として注目される。



第1図 遺跡の位置 (1/250,000)



第2図 周辺の遺跡 (1/50,000)

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	天王	古代・中世	22	小丸山	縄文	39	川西	縄文
2	国上寺遺跡群	古代・中世	23	弁才天窓	古代	40	戸戸窓	古代
3	夕暮れの岡	古墳	24	本山舞台島	弥生	41	吉竹北	古代・中世
4	竹ヶ花	弥生・古墳・古代・中世	25	年友お経塚	不明	42	田頭城	中世(室町)
5	居下	古代	26	村居前	縄文	43	戸戸城	中世(戦国)
6	渡部城	中世(戦国)	27	法嶽	縄文	44	木島砦	中世(室町)
7	力ノ尾北	古代	28	七十歩	縄文	45	山王	縄文
8	力ノ尾南	古代	29	竹森城	中世(室町)	46	土手上	古墳・古代
9	宝崎	縄文・古墳・古代・中世	30	草薙	縄文・弥生・古墳・古代	47	下桐松葉	縄文
10	穴ノ入	古代	31	諏訪田	弥生・古墳・古代・中世	48	鶴端	縄文
11	幕島	縄文	32	横流山	縄文・弥生・古墳・古代	49	金八雨乞山	古代
12	新保入	縄文・古代・中世	33	京田	古代	50	長八	古代
13	当新田山下	古代	34	野起	縄文・弥生・古墳	51	弥助	古代
14	道上	古代か	35	太屋敷	古代	52	念仏塚群	不明
15	丸田	古代	36	北曾根	古代	53	大谷塚	不明
16	京ヶ入	縄文・古代	37	五千石	縄文・弥生・古墳・古代	54	馬道塚群	不明
19	稻場	古代	38	熊ノ森	縄文	55	馬道塚	不明
20	幾面	中世	39	川西	縄文	56	年友城跡	中世(室町)
21	向屋敷	縄文・古代・中世	38	熊ノ森	縄文	57	箕輪	古代

第1表 周辺の遺跡

第Ⅲ章 調査の方法と経過

1 試掘確認調査

金八遺跡が含まれる湯2期地区の試掘確認調査は、寺泊町教育委員会が主体となり平成17年9月27日から11月11日に実施した。総トレンチ数は570か所、調査総面積は3,420m²である。調査結果は「平成18年度長岡市内遺跡調査概要報告書」に報告済みであるため、金八遺跡に関する部分のみここに記載する。金八遺跡に関する調査トレンチは9か所で、調査面積は54m²である。表土下40~50cmで古代の遺物包含層を1層確認し、土師器・須恵器が出土した。遺構は検出されなかったが、細片ながらも遺物が定量出土し、周辺にも包含層が良好な状態で残存していることが予想されたため、工事の計画内容によっては本発掘調査が必要と判断した。

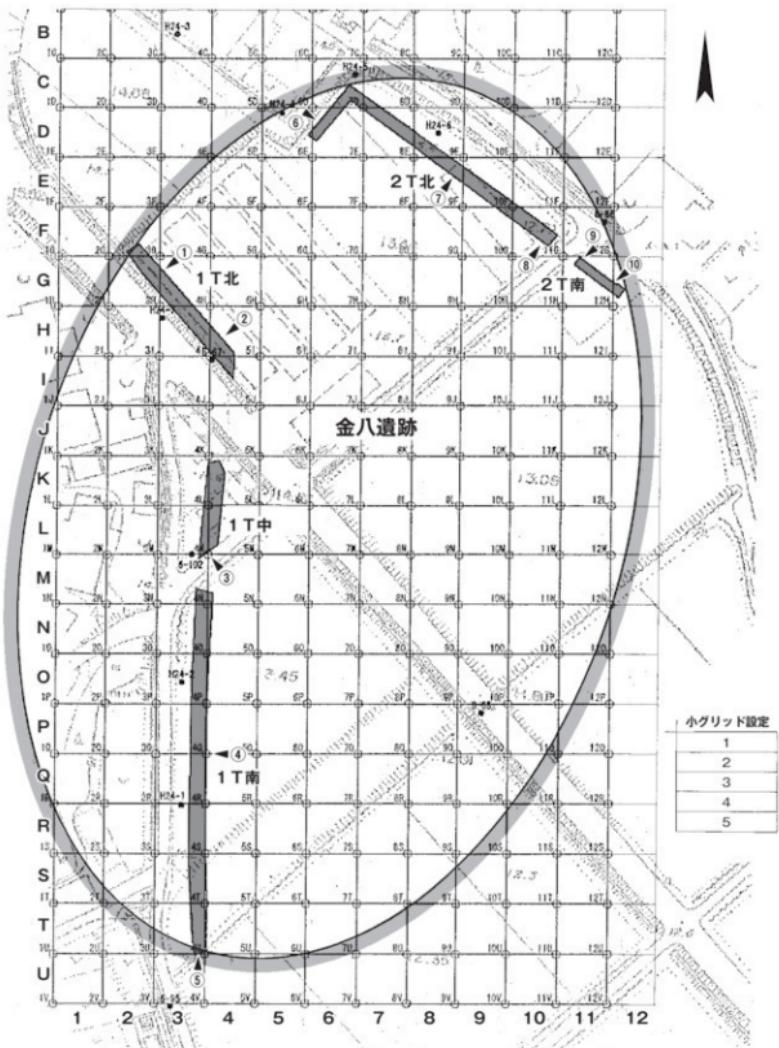
2 本発掘調査と整理作業

本発掘調査は工事の進捗状況に合わせて平成24年度に実施した。5月28日から基本測量を行い、調査区を設定した。29日から重機による表土除去を開始し、6月4日から作業員を勤員、1Tから本格的な発掘調査を開始した。調査を進める中で、当初1面と考えていた遺構確認面が2面存在することが判明し、以後の調査計画を見直す必要が生じた。同15日、1TのIV層遺構の発掘を終了し、V層遺構の調査へ移った。1T南で自然流路を4条検出し、覆土から繩文土器が出土した。この発見により本遺跡の時期幅が大きく広がった。同25日、1Tと並行して2Tの調査に着手した。調査も終盤を迎えた26日、寺泊中学校2年生105名と大河津小学校6年生37名が発掘調査の見学に訪れた。翌27日には寺泊中学校1年生88名の見学があった。7月6日、梅雨空の下、2T北のV層遺構を完掘した。遺構の最終測量を行い、同13日、作業道具を撤去し全ての現場調査を終えた。直後に工事が控えていたため、埋め戻しは行わなかった。

整理作業は平成24年度に遺物の水洗い・注記・実測、遺構観察表の作成、遺構詳細図のトレースを行った。平成25年度に遺物図面のトレース、遺物写真撮影、原稿執筆を行い本書を刊行した。



第3図 調査区周辺図 (1/10,000)



第4図 調査区配置図 (1/1,000)

第IV章 調査の成果

1 調査区の設定と基本層序（第4図～第6図）

パイプライン及び排水路の施工予定箇所に調査区を設定した。1Tの幅は掘り方上場で3.5m、2Tの幅は同2.8mとした。調査対象範囲には任意の10mメッシュのグリッドを設定し、北西隅を基点として西から東へ1から12の数字を、北から南へAからUの英字を割り当てて大グリッドとした。また、各大グリッドを北から南へ2m単位に短横に区切り、1から5の数字を当てて小グリッドとした。この2つのグリッドを組み合わせて2B-3、5A-4のように表記し、遺物の出土位置や遺構の位置の記録に用いた。総調査面積は735m²である。

調査地の現況は丘陵の谷部に拓かれた田んぼで、田面標高は14m前後である。遺跡の基本層序は、以下のI～Ⅷ層に分けられる。

I層：10YR6/6 明黄褐色粘質土（表土、現代の耕作土、客土あり）

II層：10YR5/1 暗灰色粘土（近世・近代の耕作土）

III層：10YR8/1 灰白色粘質土（古代・中世の遺物包含層、炭化物粒子を含む）

IV層：25Y4/1 黄灰粘質土（古代の遺構確認面、古墳時代前期の遺物包含層、炭化物粒子を多く含む）

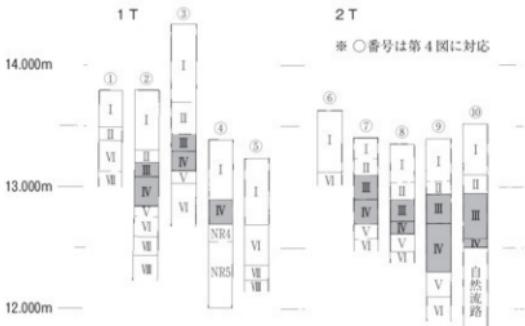
V層：5Y8/1 灰白色粘質土（古墳時代前期の遺構確認面、炭化物粒子を含む）

VI層：10YR8/1 灰白色粘土

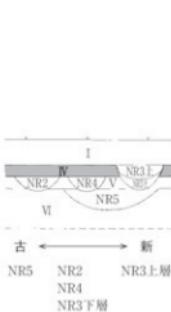
VII層：5Y6/2 灰色砂質土

VIII層：5Y4/1 灰色粘質土

遺物包含層はIII層（古代・中世）とIV層（古墳時代前期）の2層、遺構確認面はIV層上面（古代）とV層上面（古墳時代前期）の2面である。上下どちらの包含層とも遺物量は少ない。現地では昭和35年から人力による耕地整理が実施され、一部旧地形の改変が行われた。田面の削平や盛り土、水路の切り直し、丘陵裾部の削平等が行われたと聞く。その影響か、1T北の北西半分と1T南の北端・南端部ではIII層が確認できなかった。IV層、V層についても同じような状況が見られる。図版1に示したように遺構の分布に斑があるのには、このような事情も関係すると思われる。他に特記すべき事項として、今回の調査では



第5図 基本層序 (1/40)



第6図 NR2~5セクション模式図

埋没した自然流路を多数検出した。丘陵裾部から湧き出た清水が谷の中央部へと集まる過程で形成された流路で、同一地点に何条も重なって検出された。これら自然流路については、VI層より上面で検出したものにのみ遺構番号を付した。発掘調査ではI・II層を重機で除去した後、III層以下を人力で発掘した。ただし、自然流路の調査では一部バックホウを使用した。

2 遺構（図版2～7）

（1）IV層（古代）の遺構

1 T北・中・南でピット（SP）5基と溝（SD）1条、土坑（SK）1基、自然流路（NR）1条を検出した。2 T南・北では遺構は確認できなかった。後世の削平を受けており、遺構の密度は薄い。

SK1 1 T南のはば中央の3Q-2・3グリッドで検出した。中央部を斜めに横切るように暗渠管が敷設している。平面は方形で、断面は弧状を呈し、深さは18cmと浅めである。覆土は2層で、灰白色粘土をブロック状に含んでおり、短時間で埋め戻された可能性がある。遺物は1・2層及び暗渠管理設土から土師器・須恵器片が出土している。このうち3点を図化した。2層から須恵器の高台壺（1）と須恵器の壺（2）が、暗渠管理設土からは土師器の壺の底部（3）が出土している。

ピット 1 T中4L-3グリッドで検出したSP1は、平面は円形を呈し、径36cm、断面は箱状で深さは17cmである。覆土は2層に分層でき、柱の抜き取り痕跡が見られる。1 T北3G-4グリッドで検出したSP6は、深さ12cmと浅いが2段落ちの階段状の断面形を呈す。その他、IV層で検出したピットは深さは10~14cmと浅めで、いずれも遺物は出土していない。

NR3 1 T南の中央、3P-3~5グリッドで検出した。セクションの検討からNR3には2時期あることが判明している。IV層上面で検出した上層NR3は、幅2.6m、深さ50cm、北東・南西方向に主軸を持ち、両端は調査区外に続く。遺物は出土していない。直下にNR2・4・5、SD2があることから、旧地形では沢や窪みであったと考えられる。上層NR3の存在は、古代以降もこの地点に沢地形に所以する窪みが残存していたことを示唆している。

（2）VII層（古墳時代前期）の遺構

ピット32基、土坑3基、溝5条、自然流路を検出した。1 T北の南端から1 T中にかけて、及び1 T南の中央付近に遺構が密集する。1 T南の中央部では旧地形の沢に由来すると思われる4条の自然流路を検出した。また、2 T北の北端では蛇行する溝を検出した。

SK2 1 T南のはば中央、3P-2・3グリッドで検出した。平面は不整な梢円形で、断面は弧状を呈し、深さは13cmと浅めである。覆土は2層である。SK3よりも新しい。

SK3 1 T南のはば中央、3P-2・3グリッドで検出した。平面は不整形で、断面は弧状を呈し、深さは5cmと浅い。覆土は単層である。SK2よりも古い。

SK4 2 T北の10F-1・2グリッドで検出した。平面は不整な隅丸方形で、断面は凹凸のある階段状を呈す。深さは21cmと本遺跡の土坑では最も深いが、遺物は出土しなかった。

SD2 1 T南の中央、3P-4・5、3Q-1グリッドで検出した。幅112cmで調査区に直行する西東方向に伸び、溝の両端は調査区外へとさらに続く。周辺ではSD2と軸をそろえるように自然流路NR3・4・5が検出された。このことから、ここが旧地形における谷部であったと想定できる。遺物が出土しなかつたため時期の特定は難しいが、SD2はNR3・4・5が埋没した後に掘りこまれており、NR3から古墳時代前期の土師器（7・8）

が出土したことから考えると、SD2の時期も古墳時代前期以降と考えられる。

SD3 1 T南の南端に近い3R-4、3S-1~3グリッドで検出した。北西-南東方向に軸を持ち、延長約6.2m分を検出した。溝の両端は調査区外へと続いている。幅は66cmで、深さは10cmと浅い。覆土は2層で、上層から時期不明の土師器の壺（5）が出土した。

SD4 1 T北の4H-4グリッドで検出した。深さは8cmと浅く、遺物は出土していない。

SD7 2 T北の北端、6C-4・5及び7D-1グリッドで検出した。不規則に蛇行し、途中で二股に分かれる溝である。およそその軸は調査区東側の丘陵裾部に沿っている。断面は台形を呈し、深さは最深で58cmを測る。覆土は3層または4層に分けられ、植物遺体と炭化物粒子を含み縒まりがない。SD7付近ではII～V層が確認できず、I層直下にVI層が堆積する。昭和の耕地整理で大きく削平された結果と考えられ、覆土に縒まりがないこと、遺物が出土しないことも併せて考えると、SD7は近代以降に掘削された農業用水路である可能性が高い。

SD8 2 T北の南端、9F-1・10F-1グリッドで検出した。東西方向に軸を持ち、東側は調査区外へさらり伸びる。断面ⅡはU字状を呈し、深さ29cm、覆土は2層である。遺物は出土していない。

SP23 1 T中の東側壁面で検出した。長軸58cm、単軸44cmの楕円状のビットで、深さは34cmで断面は台形をなす。覆土は1層で、内部から径24.4cmの柱根（49）と高环の脚部（4）が出土した。同様に柱根が出土しているSP24とも近く、1棟の掘立柱建物となる可能性もあるが、調査区が狭いためはっきりとした確証はつかめなかった。

SP24 1 T中の西側壁面で検出した。径42cmほどの円形のビットで、深さは22cmである。SP23と同様に柱根（50）が出土しているが、SP23のものよりは細い材である。壁面はほぼ垂直に掘りこまれているが、上部にあった構造物の重さのためか、底部の中央が沈み込んでいる。

その他のビット 単層のビットが多い中、1 T中の4K-5グリッドで検出したSP9とSP10、同4K-4グリッドで検出したSP13とSP14は2層に分層される。SP10はセクションから柱と掘り方が観察でき、先述したSP23・SP24と共に掘立柱建物を構成する可能性も考えられる。1 T中4K-4グリッドのSP15、1 T中4K-4グリッドのSP25、1 T北4H-5グリッドのSP27、1 T中4I-1グリッドのSP31、1 T北4H-1グリッドのSP32は、単層ながら深さが20cmを超える。本遺跡では深い部類のビットである。

NR2・3・4・5 1 T南の3P・3Qグリッドで検出した。主軸は少しずつずれるが、大きく見ると東西方向を基準とする。旧地形の沢筋にあたる場所と考えられ、沢水が谷の低地部へと集まる過程の流路であろう。IV層上面で検出した上層NR3との関係から、この沢は古墳時代前期に大方埋没し、古代には浅い窪み程度になっていたと考えられる。NR2の最下部から縄文時代晩期の鉢（6）と弥生時代後期あるいは古墳時代前期の土師器壺の部品片が、NR3の最下部から弥生時代末ないし古墳時代前期の土師器（7・8）が、NR5の下部から縄文時代の鉢（9）が出土した。

3 遺物（図版8・9）

コンテナ2箱分の遺物が出土した。調査面積に対する遺物量は少ない。包含層出土遺物が全体の9割以上を占め、Ⅲ層からの出土が多い。内訳は縄文土器、古墳時代前期の土師器、古代の土師器・須恵器、珠洲焼、鉄滓、フレーク、柱根で主体を成すのは古代の土師器・須恵器である。

SK1（1～3）須恵器の高台壺（1）・壺（2）、土師器の壺（3）が出土した。1は高台を欠損しており、外面の底部付近にヘラ削りが施される。いずれも平安時代の所産である。

SP23 (4・49) 土師器の高坏の脚部 (4) は古墳時代前期に位置付けられ、内面はナデ、外面は磨滅が著しいがミガキ調整であったと考えられる。胎土に長石粒子を含む。柱根 (49) は長さ46.2cm、径24.4cm の芯持ち材で、平らな底部に複数のはつり痕が認められる。樹種は照葉樹か。

SP24 (50) 長さ16.8cm、径14.8cmの芯持ち材の柱根で、SP23の柱根と比べると細い。底部は大きく2方向からのはつりが行われ、尖る。樹種は照葉樹と考えられる。

SD3 (5) 土師器の壺の頸部片である。器壇が厚いのが特徴で、古代の西古志型壺あるいは古墳時代前期の壺と考えられるが、時期は不明である。胎土に石英、長石粒子を少量含む。

NR2 (6) 繩文時代晚期の鉢の底部で、胴部外面に2条の平行沈線が横位に巡る。内面及び底部外面はナデ、胴部外面は繩文を施す。胎土に石英、長石粒子を大量に含み、器壇は薄く良く焼締められている。

NR3 (7・8) 7は壺の胴部片で、器壇が薄く、外面に密なハケ調整が施される。8は土師器の壺底部で外面に密なタテハケが一部残る。いずれも弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての時期が想定できる。

NR5 (9) 繩文時代晚期の深鉢の胴部片である。地紋に繩文を施し、胴部上半に無文帯を持つ。

遺構外 (10~48) I・III・IV層から遺物が出土した。10~15は古墳時代前期の土師器である。10は壺蓋のつまみ部分、11は小型壺、12~14は高坏ないし器台である。16・18・19は古代の土師器で、17は柱状高台を持つ中世の壺である。21~42は古代の須恵器で、22・23・25・26は小泊産、24はその他の産と考えられる。29~33は壺蓋で、29・30は扁平な宝珠つまみ、33は環状紐を持つ。35は壺、34・36~41は壺、42は横瓶である。43~47は中世の珠洲焼である。48は今回の調査で唯一出土した鉄滓である。

第V章 まとめ

調査の結果、金八遺跡は古墳時代前期と平安時代に営まれた集落跡であることが判明した。遺物・遺構が少ないため、遺跡の具体的な性格を提示するのは難しいが、推測を含めて若干の考察を行ってみる。遺跡は引岡集落の中でも谷の最深部寄りに立地する。寺泊地域での集落形成は一般的に丘陵に挟まれた谷の最深部付近に始まるが多く、この観点に立つと金八遺跡は引岡集落の原形であるとも考えられる。一方、今回の調査区内には遺構が少なく、遺跡の中心は別の場所に存在する可能性が高い。現在の宅地と重なる丘陵裾部や、昭和の耕地整理時に遺物が大量に出土したとの証言が残る、調査地の西側の田んば面が有力と見られる。集落の南東を流れる島崎川は、信濃川の増水や大雨時に排水不良を起こしやすく、流域の水田は泥炭層（ガツボ）が厚く体積する深田である。「引岡」の地名は「水が匂く丘（岡）」に由来するとも伝えられ、谷の最深部付近に位置する金八遺跡はより水害を被りにくい、初現期の農耕集落としてふさわしい立地と言える。今回の調査では自然流路、NR2・5の下部から繩文時代晚期の土器が出土した。寺泊戸崎や寺泊夏戸では、近年繩文遺跡の発見が相次いでおり、海岸部に近い場所での繩文文化の様相が明らかになりつつある。今回の繩文土器の発見もそれに大きく寄与するものであろう。また、1T中で検出した古墳時代前期の柱根を作ったピット2基は、この時期の人々の定住を証明するものである。今後は調査結果を元に、各時代を通じて遺跡数の多い大河津地区との対比を行いながら、比較的海岸部に近い引岡集落において、どのように人々が定住し生産基盤を確立していくのかを検証する必要がある。

参考文献

- 寺 泊 町 1991『寺泊町史』資料編I 原始・古代・中世
八重樫由美子 2006『寺泊潟地区 資料収集調査』『平成17年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』長岡市教育委員会

第2表 遺構観察表

回数 No.	遺構名	位置	形状	規格 (cm)	前面標高 (m)
SPI	トレンチアーリット地盤面	平面形	直角形	長幅 100 幅 20 厚さ 10	105.00
SP1	1T南 3S-2 V型	直角	直角	幅 24 厚さ 10	12.94
SP5	1T北 3S-2 V型	直角	直角	幅 16 厚さ 14	13.07
SP6	1T北 3S-2 V型	直角	直角	幅 24 厚さ 12	13.07
SP7	1T北 3S-2 V型	直角	直角	幅 18 厚さ 10	13.06
SP9	1T中 4S-5 V型	直角	直角	幅 22 厚さ 22	12.81
SP10	1T中 4S-5 V型	直角	直角	幅 26 厚さ 24	12.79
SP11	1T中 3S-2 V型	直角	直角	幅 32 厚さ 28	11.283
SP12	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 16 厚さ 16	12.77
SP13	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 18 厚さ 18	12.82
SP14	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 24 厚さ 18	12.82
SP15	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 22 厚さ 16	12.63
SP16	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 28 厚さ 20	12.73
SP17	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 22 厚さ 18	12.82
SP18	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 26 厚さ 26	12.78
SP19	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 28 厚さ 28	12.81
SP20	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 18 厚さ 18	12.79
SP21	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 16 厚さ 16	12.76
SP22	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 20 厚さ 12	12.93
SP23	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 58 厚さ 44	34.1266
SP24	1T中 4S-4 V型	直角	直角	幅 12 厚さ 12	12.733

回数 No.	遺構名	位置	形状	規格 (cm)	前面標高 (m)	備考
SD2	1T南 3S-1 30-1 V型	直角	直角	-	11.2	31
SD3	1T南 3S-4, 28-1-3 V型	直角	直角	(622)	66	10
SD4	1T北 4H-4 V型	直角	直角	(68)	20	8
SD7	2T北 6C-4, 7D-1 V型	直角	直角	(702)	46	58
SD8	2T北 6C-4, 10D-1 V型	直角	直角	(240)	29	29
SD9	2T北 30-1, 31-1-2 V型	直角	直角	-	47.8	21
SD10	2T北 30-1, 31-1-2 V型	直角	直角	-	260	50
SD11	1T南 3H-3, 5-1-1, 5-1-2 V型	直角	直角	-	244	32
SD12	1T南 30-1-2 V型	直角	直角	-	270	56
SD13	1T南 3H-3, 5-1-1, 5-1-2 V型	直角	直角	-	12.46	12.00

第3表 遺物観察表

回数 No.	遺物	出土地位置	種別	形態	目録番号 (日付/既存番号)	残存率	既成	動土	色調	調整		備考
										前面 (m)	裏面 (m)	
1	T南 3S-2 SK1	20	陶器	高台杯	531 (82)	銅器 18	良好	是	灰白	ナデ・ハラ削り	ナデ	
2	T南 3S-2 SK1	20	陶器	直腹	532 (82)	銅器 16	良好	是	灰白	ナデ・ハラ削り	ナデ	平手タケリ 同品1件で用
3	T北 2S-2 SK1	20	陶器	直腹	5.8 (18)	銅器 16	不良	否	灰白	ナデ	ナデ	
4	1T南 4K-5 SP23	1期	土器	高杯	13.0 (82)	銅器 6	やや軟	青	碧	ナデ	ナデ	
5	1T南 2S-1 SD3	1期	土器	直腹	2 (25)	銅器 2	良好	是	黄灰	ナデ	ナデ	
6	1T南 2P-2 SD3	7期	土器	鉢	6.0 (57)	銅器 3	良好	是	青灰	ナデ・穂文	ナデ	
7	1T南 2P-2 SD3	7期	土器	直腹	5.8 (57)	銅器 2	良好	是	青灰	ナデ	ナデ	
8	1T南 2P-2 SD3	7期	土器	直腹	6.0 (12)	銅器 2	良好	是	灰	ナデ・ハラ	ナデ	
9	1T南 3S-1 SK1	20	陶器	直腹	15.4 (14)	銅器 2	良好	是	灰	ナデ・ハラ	ナデ	
10	1T南 3S-1	1期	土器	直腹	1.0 (1)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
11	1T南 4K-5 SP23	1期	土器	直腹	7.2 (29)	銅器 6	やや軟	青	青灰	ナデ	ナデ	
12	1T南 3R-3	直腹	直腹	直腹	2 (28)	銅器 6	良好	是	灰	ナデ	ナデ	
13	1T南 4K-4	直腹	直腹	直腹	4 (40)	銅器 6	良好	是	灰	ナデ	ナデ	ハラミガニ
14	1T南 4K-4	直腹	直腹	直腹	15.4 (4)	銅器 2	良好	是	青灰	ナデ	ナデ	
15	2T北 10E	直腹	直腹	直腹	1.0 (1)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
16	2T北 11E-3	直腹	直腹	直腹	8.6 (12)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
17	1T南 3S-2	直腹	直腹	直腹	7.4 (24)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
18	1T南 4H	直腹	直腹	直腹	7.5 (10)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
19	2T北 10E	直腹	直腹	直腹	6.0 (26)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
20	1T北 3G-3 SP23	1期	土器	直腹	19.0 (21)	銅器 16	良好	是	灰白	ナデ	ナデ	
21	1T南 3Q-2	直腹	直腹	直腹	12.0 (26)	銅器 16	良好	是	灰白	ナデ	ナデ	
22	2T北 9E	直腹	直腹	直腹	1.0 (26)	銅器 16	良好	是	灰白	ナデ	ナデ	
23	1T北 3S-5	直腹	直腹	直腹	12.0 (26)	銅器 16	良好	是	灰白	ナデ	ナデ	
24	2T北 9E	直腹	直腹	直腹	1.0 (26)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	底部ヘラ切り
25	2T北 4H	直腹	直腹	直腹	11.0 (15)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	底部ヘラ切り
26	1T北 3H-5	直腹	直腹	直腹	7.4 (21)	銅器 6	良好	是	ナリープ	ナデ	ナデ	底部ヘラ切り
27	1T北 4H	直腹	直腹	直腹	5.5 (19)	銅器 6	良好	是	ナリープ	ナデ	ナデ	底部ヘラ切り
28	2T北 8E	直腹	直腹	直腹	7.0 (10)	銅器 6	良好	是	灰白	ナデ	ナデ	底部ヘラ切り
29	1T北 4H	直腹	直腹	直腹	1.0 (7)	つまみ玉	良好	是	青	ナデ	ナデ	
30	2T北 10P	直腹	直腹	直腹	1.0 (26)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
31	2T北 10P	直腹	直腹	直腹	1.0 (26)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
32	1T北 3H-3	直腹	直腹	直腹	1.0 (13)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
33	2T北 10P-1	直腹	直腹	直腹	1.0 (26)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
34	1T北 3S-1	直腹	直腹	直腹	1.0 (26)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
35	1T北 2P	直腹	直腹	直腹	7.0 (8)	銅器 16	良好	是	青	ナデ	ナデ	
36	1T北 4H	直腹	直腹	直腹	1.0 (8)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
37	1T北 4I	直腹	直腹	直腹	1.0 (8)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
38	1T北 4I	直腹	直腹	直腹	1.0 (8)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
39	1T北 3H-1	直腹	直腹	直腹	1.0 (8)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
40	1T北 3R-3	直腹	直腹	直腹	1.0 (8)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
41	1T北 3S-5	直腹	直腹	直腹	1.0 (8)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
42	1T北 3H-5	直腹	直腹	直腹	1.0 (8)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
43	2T北 11G-1	直腹	直腹	直腹	29.2 (23)	銅器 16	良好	是	青	ナデ	ナデ	
44	1T北 3H-5	直腹	直腹	直腹	1.0 (8)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
45	1T北 2R-5	直腹	直腹	直腹	1.0 (8)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
46	1T北 11G-1	直腹	直腹	直腹	1.0 (8)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
47	1T北 11G-1	直腹	直腹	直腹	1.0 (8)	銅器 6	良好	是	青	ナデ	ナデ	
48	1T南 3S-2	直腹	直腹	直腹	5.1 (4)	幅 22	良好	是	青	ナデ	ナデ	
49	1T北 4K-5, 4L-1	SP23	直腹	直腹	46.2 (24)	20.0	良好	是	青	ナデ丸太、上部輪削、端削は平底(はつりきの底)	ナデ	
50	1T北 4R-4	SP24	直腹	直腹	36.8 (14)	10.2	良好	是	青	ナデ丸太、上部輪削、端削は大底(はつりきの底)	ナデ	

図 版

凡例

- 1 造構図・遺物図中のスクリーントーンは、以下のものを示す。

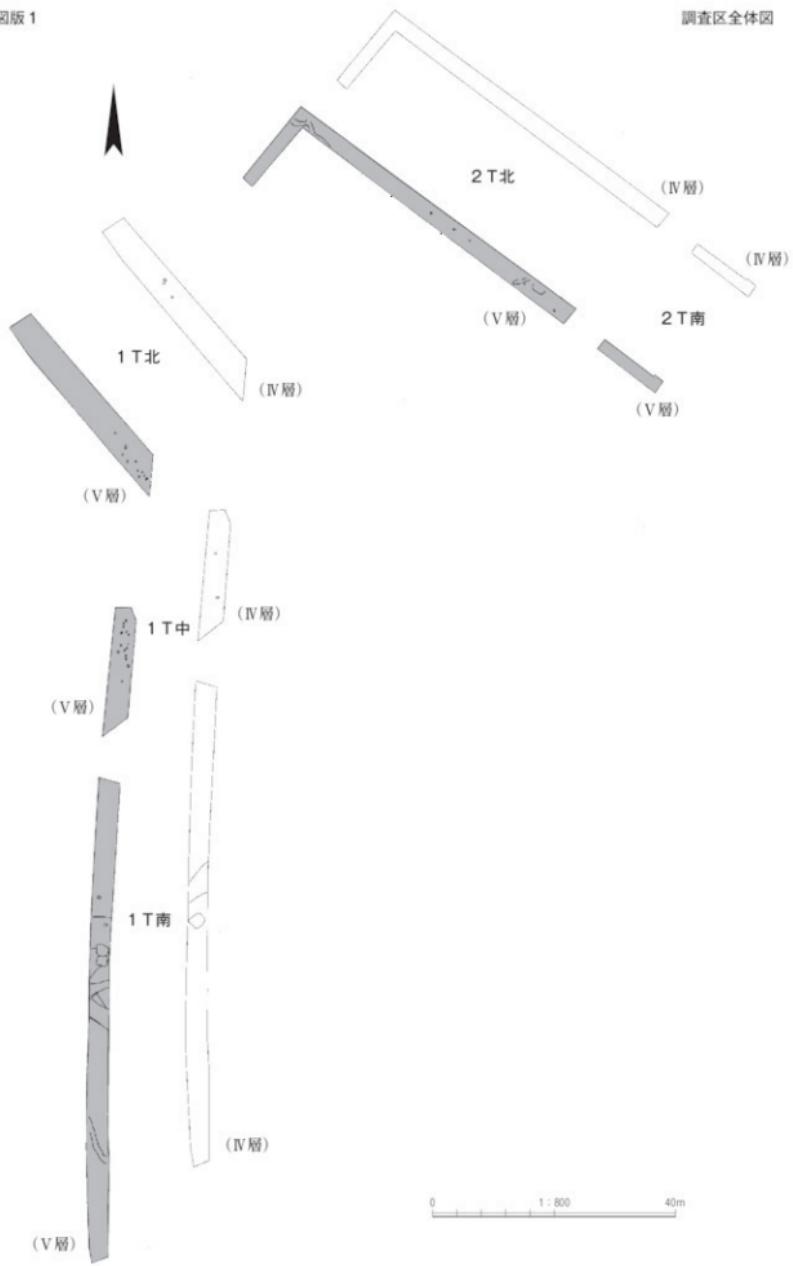


- 2 遺物の番号と縮尺は、写真図版と図面図版とで統一してある。

- 3 土層の土色観察は、『新版 標準土色帖 2003年度版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を用いた。

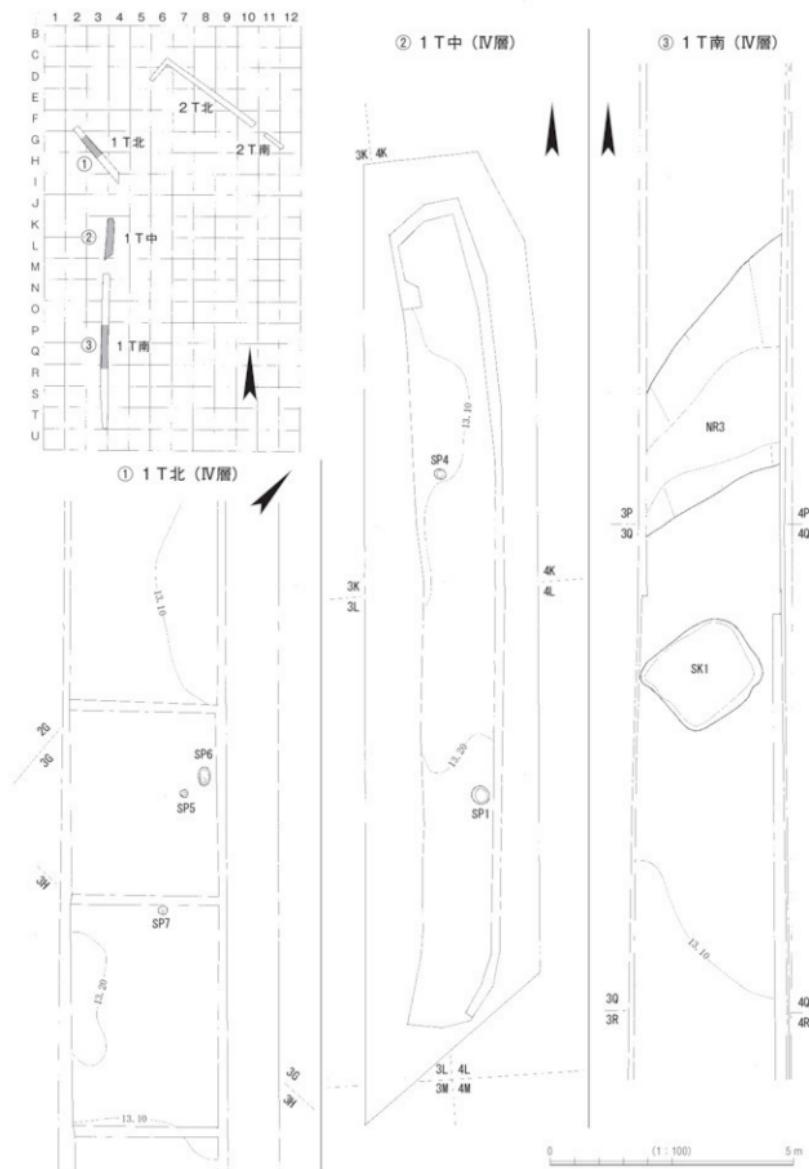
図版 1

調査区全体図



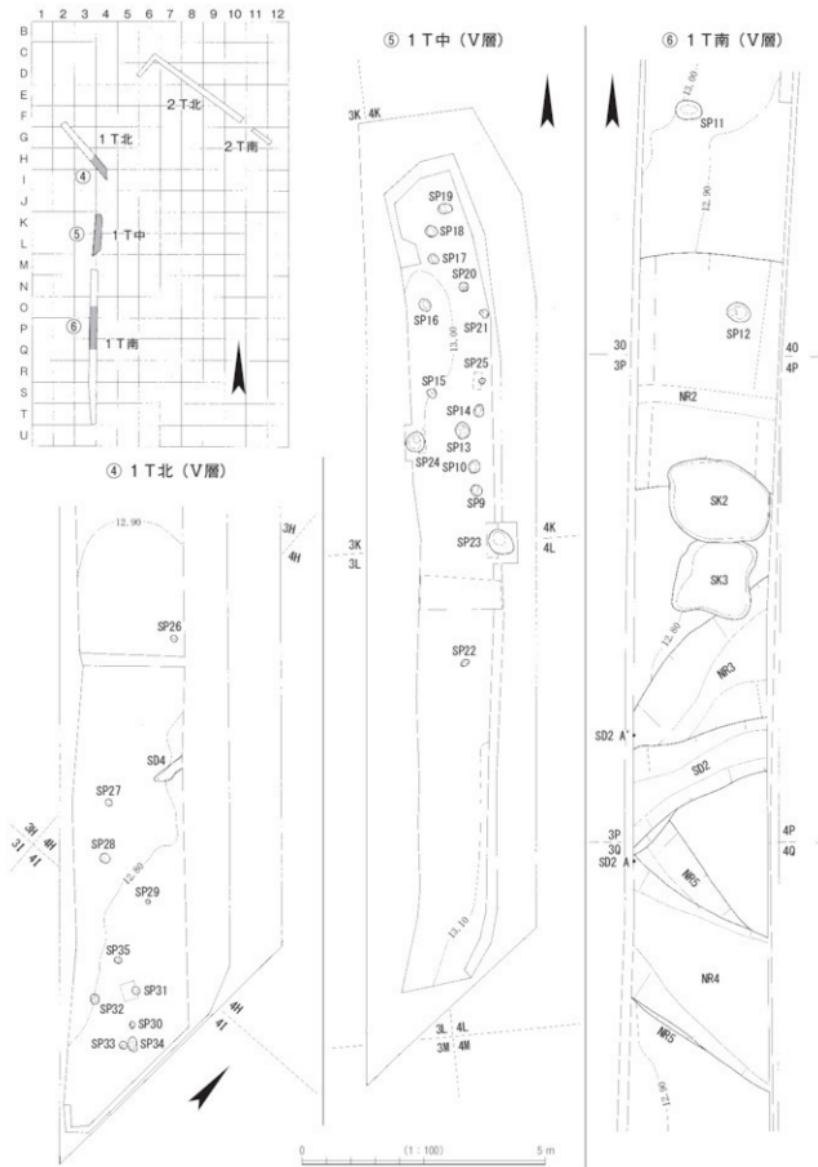
IV層遺構分割図

図版2



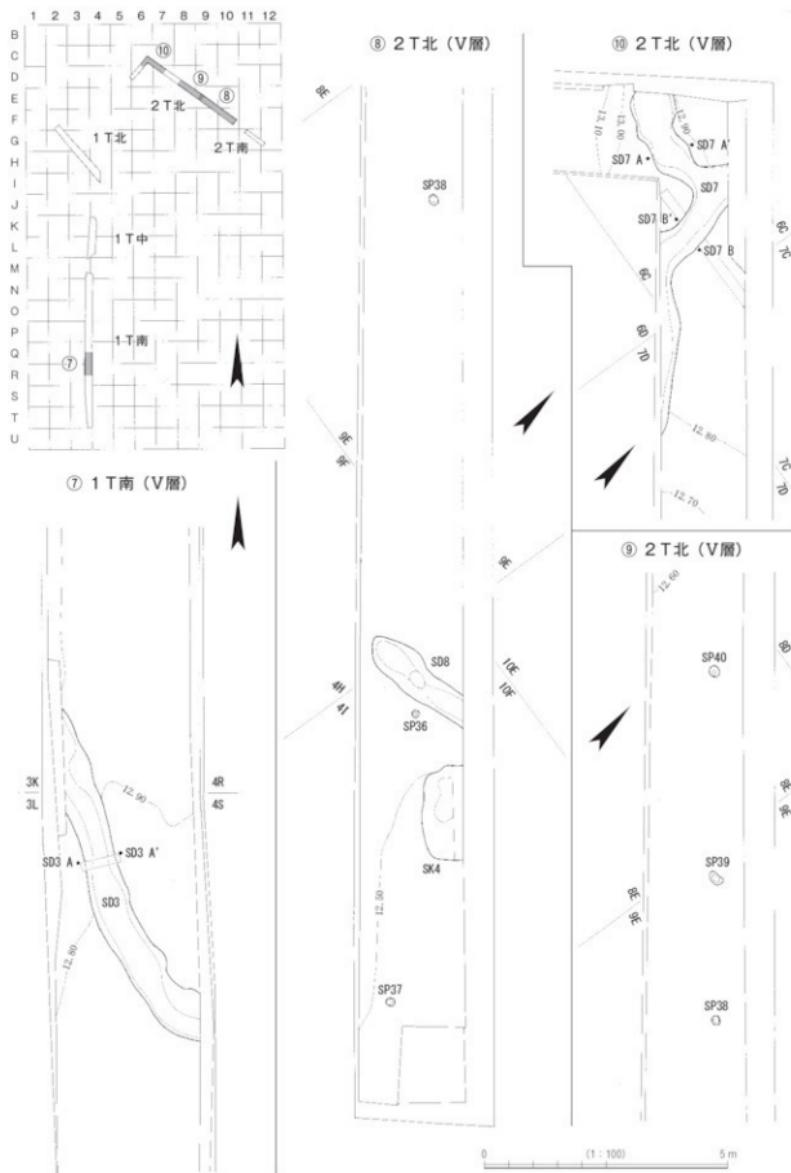
図版3

V層遺構分割図 (1)



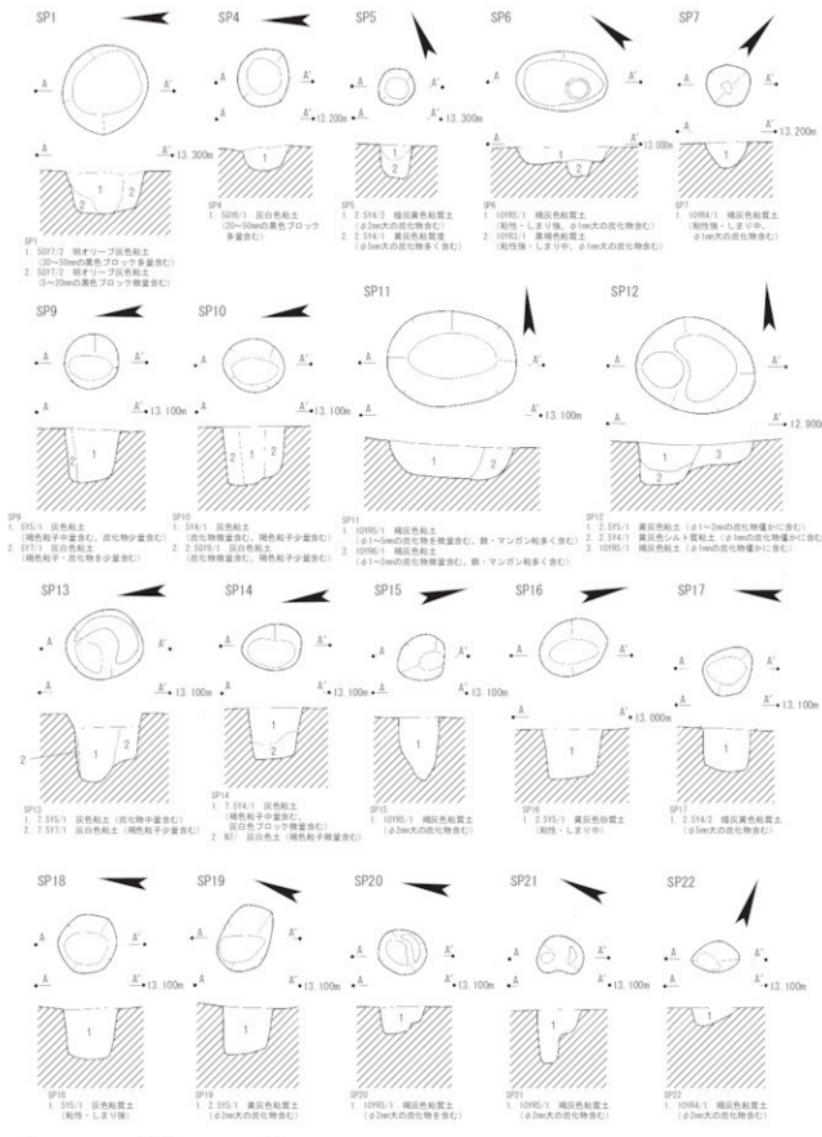
V層遺構分割図 (2)

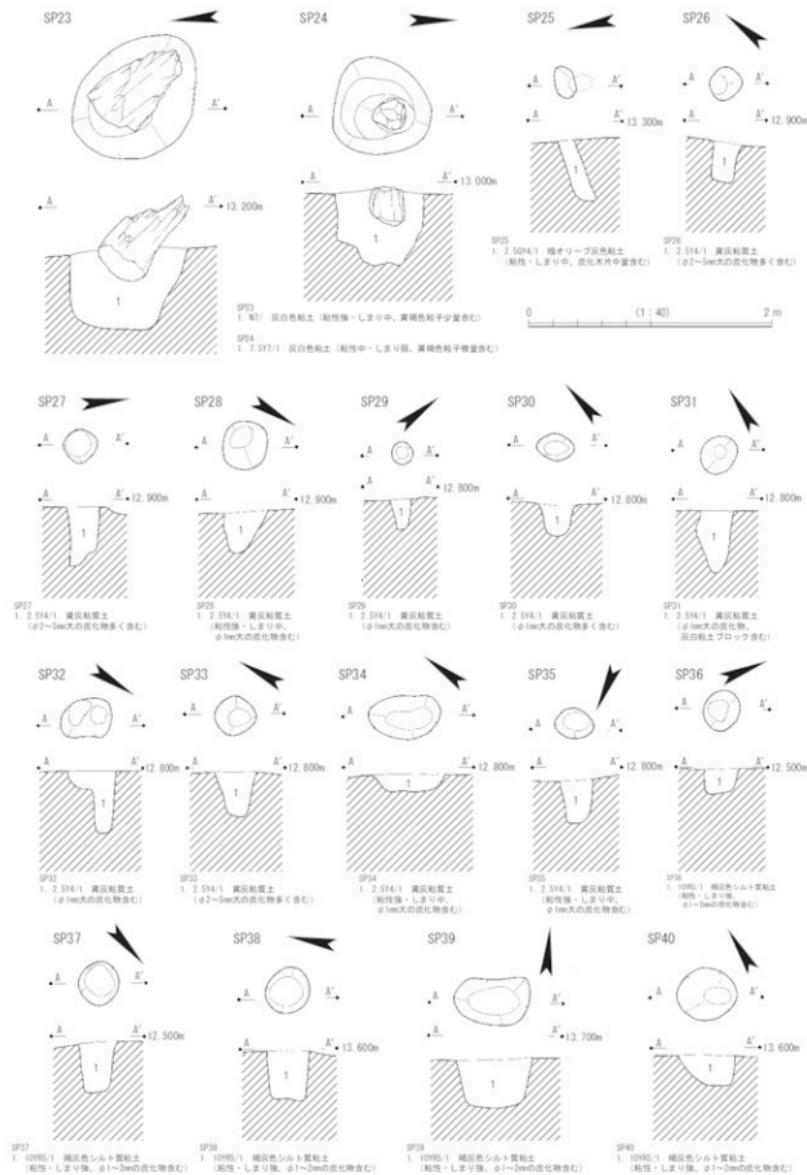
図版4



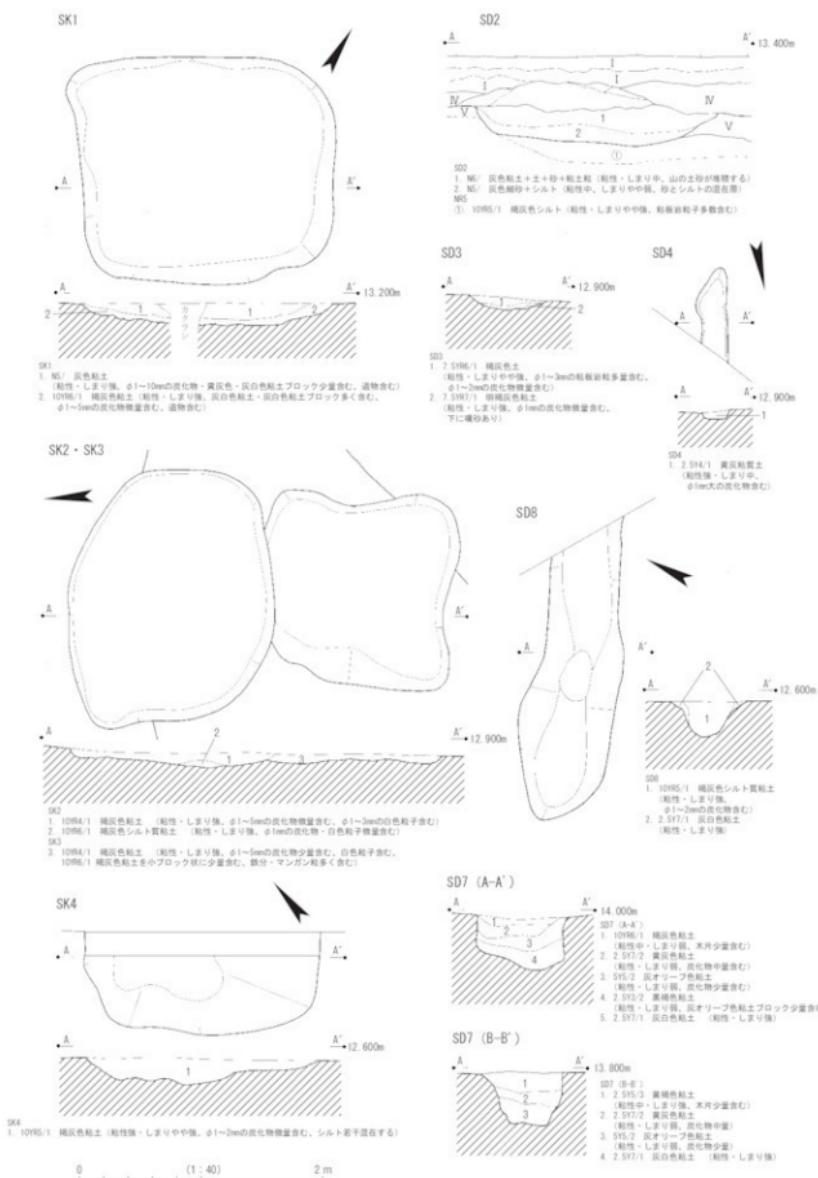
図版5

遺構詳細図 (1)



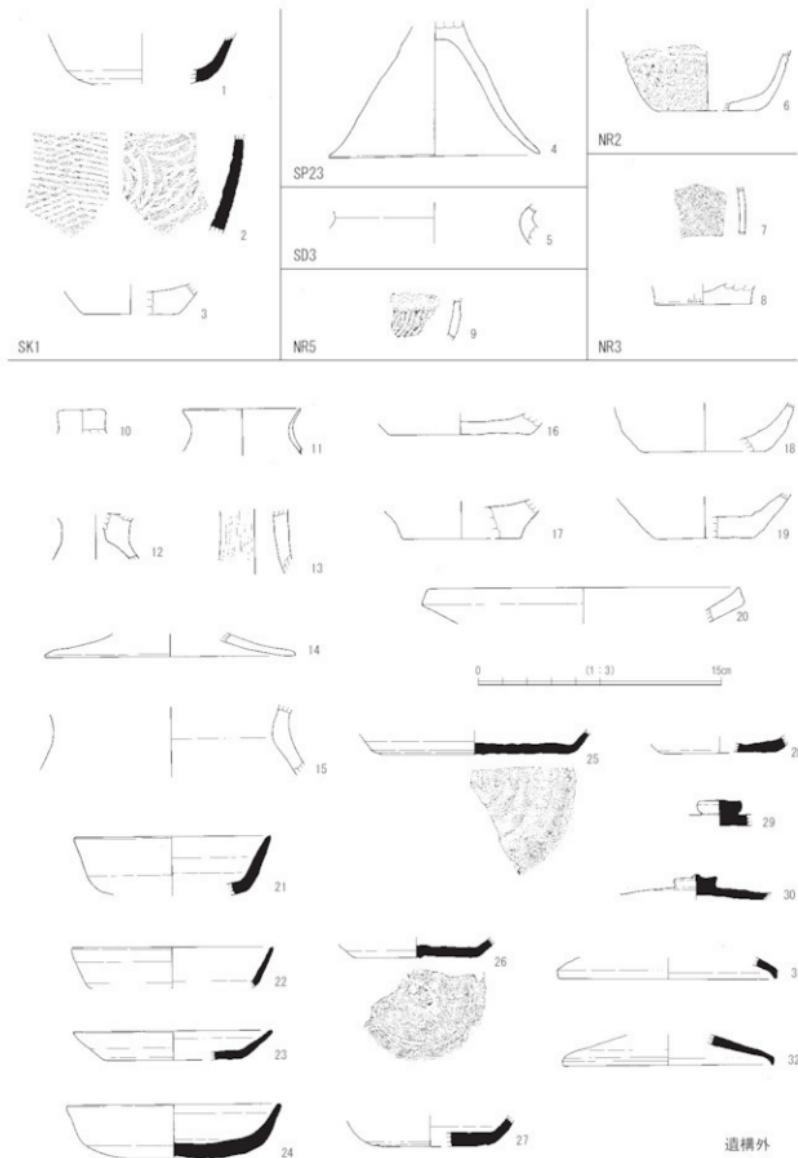


遺構詳細図 (3)



遺物実測図(1)

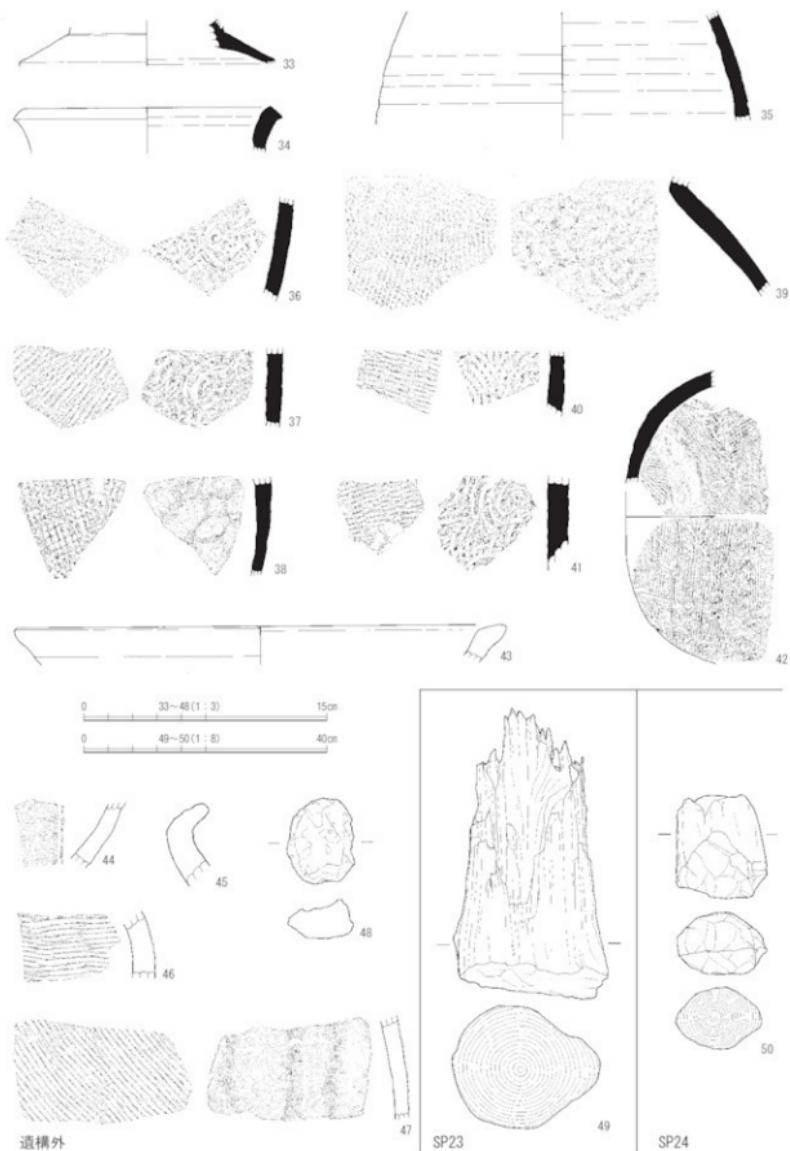
図版8



遺構外

図版9

遺物実測図 (2)



遺構外



調査地全景（南東から）



調査地近景（北西から）



1T北 基本層序（南西から）



1T中 基本層序（北から）



1T南 基本層序（南から）



2T南 基本層序(北東から自然流路部分)



2T北 基本層序(北東から)



2T南 基本層序（北東から）

図版11

遺構写真（1）



1T北 IV層遺構完掘状況（北西から）



1T北 V層遺構完掘状況（北から）



1T北 V層遺構完掘状況（北西から）



1T北 V層遺構完掘状況（南東から）



1T中 III層遺物出土・IV層遺構検出状況（南から）



1T中 IV層遺構完掘状況（南から）



1T中 V層遺構完掘状況（北から）



1T中 V層遺構完掘状況（南から）



1T南 IV層遺構完掘状況（北から）



1T南 V層遺構完掘状況（南から）



1T南 V層遺構完掘状況（北西から）



2T北 V層遺構完掘状況（北西から）



1T中 SP23セクション（西から）



1T中 SP24セクション（東から）



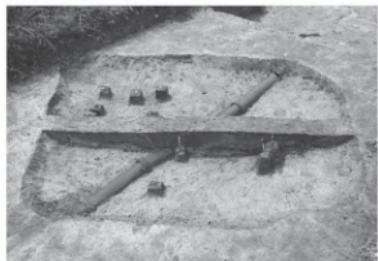
1T中 SP25セクション（西から）



1T北 SP32セクション（東から）

図版13

遺構写真 (3)



1T南 SK1遺物出土状況（南東から）



1T南 SK2セクション（西から）



1T南 SD2セクション・完掘状況（東から）



1T北 SD4セクション（東から）



2T北 SD7セクションB-B'（東から）



2T北 SD8セクション（西から）



1T南 NR2セクション・完掘状況（東から）



1T南 NR3・4・5セクション・完掘状況（北西から）



トレンチ設定作業



表土除去作業



遺構検出作業



遺構発掘作業



遺構測量作業



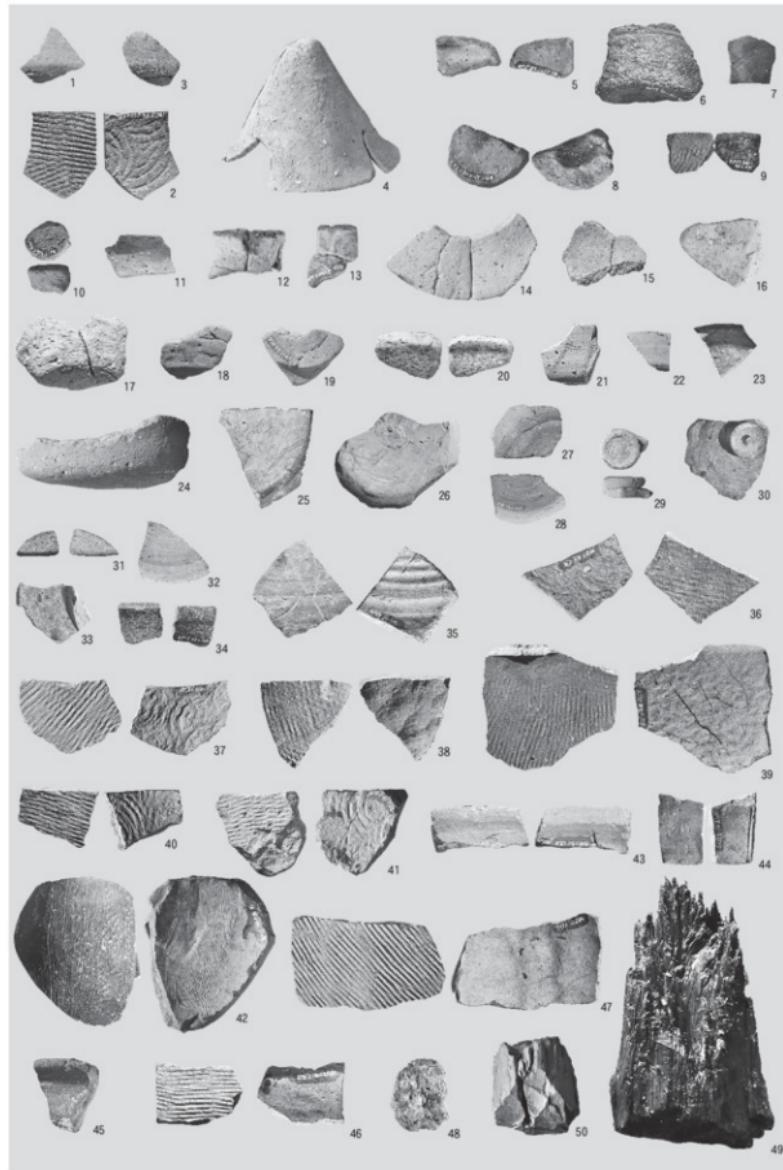
発掘調査に参加した皆さん



大河津小学校の見学会



寺泊中学校の見学会



報告書抄録

ふりがな	きんぱちいせき							
書名	金八遺跡							
副書名	県営経済体育成基盤整備事業（潟2期地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	加藤由美子 小林 徳 松井 智							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2013年12月17日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
金八遺跡	新潟県長岡市寺泊引岡	15021	1210	37° 37° 47°	138° 46° 48°	20120528 ~ 20120713	735m ²	県営経済体育成基盤整備事業（潟2期地区）
所取遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
金八遺跡	遺物包含地	縄文時代晩期 古墳時代前期 平安時代・中世		ピット・土坑溝・自然流路		縄文土器・須恵器 土師器・珠洲鏡 鉄津・柱根		引岡集落内で初めて縄文土器が出土した。

金八遺跡

県営経済体育成基盤整備事業（潟2期地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成25（2013）年12月17日 印刷

平成25（2013）年12月17日 発行

発 行 長岡市教育委員会

印 刷 有限会社めぐみ工房